

用語	用語の説明
耐震診断	昭和56年（1981年）以前の基準で設計された既存建物が、大地震に対してどの程度耐えることができるか調べるもので、その精度から第1次から第3次までであるが、柱・壁の量や鉄筋の量、コンクリート強度等から推定する第2次診断が一般的である。
新耐震基準	昭和56年（1981年）6月に導入された構造基準のことで、中規模の地震（震度5強程度）に対しては、ほとんど損傷を生じず、極めて稀にしか発生しない大規模の地震（震度6強から震度7程度）に対しては、人命に危害を及ぼすような倒壊等の被害を生じないことを目標としている。
旧耐震基準	昭和56年（1981年）5月以前の構造基準のことで、この基準で作られた建物は、震度5強程度の中規模地震に対して建物がほとんど損傷しないが、大規模地震に対する安全性を検討する必要があるとされている。
I s 値	構造耐震指標で、建物が持っている外からの圧力に耐えられる力やねばり強さを表しており、建物の階ごとに算出される。この値が大きいほど耐震性が高い。
I s o 値	構造耐震判定指標で、この数値より I s 値が大きいと「安全（想定する地震動に対して所要の耐震性を確保している）」となる。 $I s o = E s \cdot Z \cdot G \cdot U$
E s 値	耐震判定基本指標で、方向に関わらず次の値である。 第1次診断用 $E s = 0.8$ 第2次診断用 $E s = 0.6$ 第3次診断用 $E s = 0.6$
Z 値	地域指標で、その地域の地震活動度や想定する地震動の強さによる補正係数。広島市は $Z = 0.9$ と定められている。
G 値	地盤指標で、表層地盤の増幅特性、地形効果、地盤と建物の相互関係などによる補正係数。一般的には $G = 1.0$ である。
U 値	用途指標で、建物の用途などによる補正係数。建物の用途に応じてそれにふさわしい耐震性能の要求水準の相対的な関係を定めたもの。重要度係数 I とすることもある。一般的には $U = 1.0$ である。
q 値	保有水平耐力に係る指標で、地震による水平方向の力に対して建物が対応する強さを表しており、その値が大きいほど耐震性が高い。
C t u ・ S D 値	建物の耐震安全性を確保するために、I s 値の大小に加えて、建物の累積強度や形状を数値化して算出される判定基準である。この値が大きいほど耐震性が高い。
R C 造	鉄筋コンクリート造
S 造	鉄骨造
S R C 造	鉄骨鉄筋コンクリート造